

## Japanese Studies Graduate Summer School 2011 (オーストラリア・オーストラリア国立大学) に関する報告

2011年3月10日 関西学院大学大学院社会学研究科 大学院 GP 事務室

### ■ 1. 目的とスケジュール ■

#### ○ 目的：

昨年度にひきつづき、2011年2月1日～3日のあいだオーストラリア国立大学で行われた Japanese Studies Graduate Summer School に、大学院生による国際発信能力の涵養と学術交流、ネットワーキングを狙いとし、関西学院大学大学院社会学研究科の研究員、大学院生、GP プログラムの RA を含めた 8 名が発表者として参加した。発表者のうち 5 名（博士課程前期）は、前日に同大学にて行われたセミナーにおいて発表した。1 日～3 日に行われた本プログラムにはオーストラリア、アメリカ、シンガポールから 22 名の大学院生が参加し、7 つの部会（Work & Labour, Cross Disciplinary Modern Japan, Political History & Thought, Pedagogy & Education, Legacies of Japanese Colonialism, Gender & Cultural Studies, Linguistics）に分かれてそれぞれが研究報告を行った。

#### ○ 人員：

笹部建、伊藤康貴、仲修平、松村淳、山森宙史、福田雄、前村奈央佳（研究員・院生）、テランス・ヤング（GP プログラム RA）、川端浩平、中川千草（GP 事務室）

#### ○ スケジュール：

=1月29日(土)=

- ・ CX507にて関西国際空港を出発

=1月30日(日)=

- ・ キャンベラ着
- ・ 宿泊；オーストラリア国立大学学生寮

=1月31日(月)=

- ・ 13:00～16:00 プレセッション

=2月1日(火) =

- ・ 8:30～ 受付
- ・ 9:00～10:00 オープニングセレモニー
- ・ 10:30～12:00 Student Session 1: Work & Labour
- ・ 13:00～14:30 Student Session 2: Cross Disciplinary Modern Japan
- ・ 14:30～15:30 “Records on Japan in the National Archives of Australia”
- ・ 16:00～17:30 Student Session 3: Political History & Thought

=2月2日(水) =

- 9:00~10:00 Library Session
- 10:30~12:30 Student Session 4: Pedagogy & Education
- 13:30~15:00 Public Lecture by Professor Patricia Steinhoff (University of Hawaii)
- 16:00~17:30 Student Session 5: Legacies of Japanese colonialism

=2月3日(木) =

- 9:00~10:00 Master Class
- 10:30~12:30 Student Session 6: Gender & Cultural Studies
- 13:30~15:00 Public Lecture by Professor Patricia Steinhoff (University of Hawaii)
- 16:00~17:30 Student Session 5: Legacies of Japanese colonialism

---

## ■ 2. プレセミナーおよびJSGSSについて ■

### ■ プレセミナー

このセミナーは、オーストラリア国立大学内のアジア研究者のメーリングリストで告知してもらっていた。しかし、他のプレセミナーと重なってしまったために、外部の参加者は10名程度であり、すべて日本人であった。ただし、日本の大学に所属する客員研究員、オーストラリア国立大学で学ぶ日本人留学生、オーストラリア国立図書館の日本部門の司書の方々からは、ご本人たちが英語での研究発表等に苦心してきただけに、国際発表するうえでの有益かつ具体的な助言を受けることができた。それは、日英語の双方で研究、論文の執筆、口頭発表することの意義と困難について身をもって知っている人たちだったからでもあろう。

また、質疑応答は日本語で行われたが、これも英語で研究的に中身のないうりとりを行うよりも成果が得られたように思われる。しかし、発表内容と英語でのプレゼンテーションの質に関しては、その後に行われた本プログラムで報告した他大学の院生たちと比べても決して劣るものではなかった。このことは、アブストラクトの執筆、英文原稿の作成、発表練習を経れば、誰でも国際学会等の場で発表することが可能であることの証左であろう。あとは、これを足がかりとして他の国際発信の場で発表することを積み重ね、英語での質疑応答に対応できるようになることが、今後の課題といえるだろう。

このセミナーの趣旨とそれぞれの報告内容については以下のとおりである。

- Title of Seminar : “Young researchers’ views on contemporary Japanese society: Youth, Labour, Consumption, Subculture, and Urban redevelopment.”

- Purpose of Seminar

This seminar aims to present what is going on in today’s Japanese society from the perspective of young Japanese sociologists. Their presentations shall be interesting for those engaged in Japanese Studies in that what they are looking at is the frontier of intellectual activities in contemporary Japan.

However, there is a particular gap between studies about Japan engaged in by sociologists and so on in Japan and Japanese Studies as Area Studies. The researchers who study about Japan as Area Studies from outside of Japan have different interests and approaches from researchers in Japan. This can be regarded as the disassociation between Area Studies and local knowledge about the area, thus it is important for us to find linkages among those and bridge them. In this second sense, today's young researcher's presentations are still in progress as a part of finishing their Master's theses, yet should provide us with an intellectual vision about today's frontier in Japanese society. Each presentation deals with a contemporary issue but in different fields and using different approaches as follows.

Kohki Itoh

“Difficulties faced by *hikikomori* : From the life history in autobiographies and private papers”

Hiroshi Yamamori

“Historical analysis of Comics: From perspective of consumer culture and media”

Jun Matsumura

“Editing Downtown: Creating “Danjiri Matsuri” as a genuine history in the process of a community development in Hanshin Mikage Area, Kobe”

Shuhei Naka

“Redefining Self-employment in Japan: Analysis of the social mobility”

Takeru Sasabe

“Consumption of Japanese nostalgia after 2000”



[写真1 プレセミナーの様子]

## ■ JSGSS

前年度に参加した同大学で行われた同じ趣旨のプログラムである **Asia Pacific Week** と比較すると、参加人数や規模も小さく、院生の出身国も限られたものであった。関西学院から参加した3名に関しては、これまで国際発表の場での経験があることもあり、報告と質疑応答とともに大変スムーズにこなし、会場との活発な議論のやりとりがあった。また、今後の大学院 GP 以降における国際発信のことを考えると、彼・彼女らが他の院生・研究員の国際発信の促進や支援を行ううえでのアンテナとして重要な役割を果たすことができるだろう。なお、3名の報告タイトルは以下のとおりである。

Naoka Maemura

“Relationship between Japanese Workers’ Empathy and Intercultural Attitudes”

Terrance Young

“Comparing Reform During the Nakasone, Hashimoto, & Koizumi Administration”

Yu Fukuda

“When we reflect upon the dead: Post-disaster ritual in Nagasaki”

報告以外にも、ゲストスピーカーであった Patricia Steinhoff 氏（ハワイ大学）のレクチャー、オーストラリア国立図書館の見学など他のプログラムにも参加した。また、参加者は同じ学生寮で寝食を共にし、オーストラリア国立大学の教員や他大学出身の院生たちとのネットワーキングが促進された。これらのプログラムとは別に、関西学院の院生・研究員は、それぞれの発表予定の前日の夜にキャンパス内のカフェに集まり、プレゼンの練習を行ったことも、プレゼンの質や研究の問題意識を再検討するうえでとても効果的だった。

川端浩平 大学院 GP プログラム 特任助教



[写真 2 JSGSS の様子]

### 【笹部 建 (M1)】

私は、プレ-セッションの中で、研究内容を発表した。結果としては他の発表者に比べ自分の準備不足を痛感することとなった。その意味で今回の海外での発表経験は反省点が多く残るものであったが、収穫もあった。他の発表者の研究には大きく刺激を受けたし、これから自分が修士論文に向けてどのように研究を進めていけば良いのかを、おぼろげながらも見出せたように思う。

私は日本の 1960 年代から 70 年代における寺山修司の活動と、現代のノスタルジア・ブームとの繋がりを論じる発表を行った。しかし両者の関係は甚だ不明瞭なままであり、発表内容に多くの疑問点や課題を残していた。

現代メディアの中で見られる様々なノスタルジア商品と、新たな社会運動を模索する動きによる 1960 年代の学生運動の見直しが、共に 2000 年代以降様々な言説として現れた。それらは多様な展開の形をとったが、当時アンダーグラウンドと呼ばれた大衆文化の運動と学生運動の繋がりや、その後の消費社会化との関連性を論じるものは少なかったように思われた。そこで当時のアンダーグラウンド文化の担い手の 1 人である寺山修司という人物に焦点を当てることにより、現代のノスタルジア・ブームの問題を考える、ということが発表の主旨だった。しかしなぜ寺山修司に焦点を当てたのか、またそこから見えてくる現代のノスタルジアの特徴とは何か、という問題の核心部分が説明できず、発表後もその不十分さを指摘されることとなった。

報告者の一人であった Alexander Brown 氏は、日本の雇用の問題に直面する若者たち（プレカリアート）による社会運動の政治性について発表を行っていた。彼も私と同様に 1960 年代に関する言説に注目しており、何度か議論を交わした。彼の父親はオーストラリアで当時社会運動に関わり、その後ヒッピーのようなことをしていたという。日本の団塊ジュニアの世代の知人に「俺の父親は学生運動などしていなかったと言っていた」と何度か言われていた私は、オーストラリアでそのような人物に出会えたことは幸運だったと思う。オーストラリアの学生運動の事情などの詳しいことは聞けなかったが、海外との研究の繋がりを考えるための大きな収穫だった。

英語での発表ということで表現を極力シンプルにまとめ、さらには内容も社会学以外のディシプリンの中でも受容可能なまでに一般性を高めることが要求されるため、自分の問題関心の編成をかなり再考する必要に迫られた。しかしそれに見合った報酬は得られたと思う。この経験を下に、さらなる研究の進展を目指したい。

### 【伊藤康貴 (M1)】

今回のセミナーでの発表準備は 10 月ごろから始まった。およそ 4 カ月を通じて、発表のアウトラインから日本語原稿、そして英語原稿を作成し、スライドまでを完成させていくという流れとなった。日本での発表経験があっても、海外での発表経験がない私にとっては、経験豊富な GP スタッフからの支援は非常に助かったと思う。

私の英語能力はそれほど高くはないので、日本語原稿から英語原稿への翻訳が最も手間取ったように思う。日本語ネイティブスピーカーが日本語の「語り」から受け取るであろう印象を、そのまま英語で表現しようとするのはなかなか難しい作業であった。結果的には、GP スタッフの多大なる助力のおかげで、何とか形のある原稿が仕上がったと思うが、日本語の「語り」の味わいを英語で表現するのはプロの翻訳家でもなかなか難しいことであろう。海外発表における言語の壁というものは、高く

険しい山として存在しているわけである。ただし、日本語の原稿が確かなものであり、語学スタッフとの協力体制が確立しているのであれば、決して登れない山ではないと思う。よって、徹底した事前準備と周囲からの援助があるならば、なんとか形になった海外発表が出来ると思う。

また、今回の発表における英語の発音に関しては、英語原稿読み上げソフト(今回は **Read Please** というフリーソフト)を活用した。ソフトが読み上げる発音をイヤホンで聞きながら、その発音を真似るように声を出す訓練(シャドーイング)を行った。もし私の発音が多少なりとも聞き取りやすいものであったとするならば、この方法にも効果があるということなのかもしれない。

なお、他の参加者の発表を聞いていて感じたことではあるが、スライドは必ずあったほうが良い。耳だけでは聞き取れない情報も、見ることによって補完できるからである。出来ればハンドアウトも用意したほうが良い。母国語が違う人間に情報を伝えるには、ヴィジュアル的に訴えるというのが効果的であると感じた。グラフや図表にとどまらず、写真やイラスト、映像を交えることにより、言語を違える者同士の情報伝達が円滑になると思う。

最後に、海外発表における最大の課題は、質疑応答であると思う。原稿をただ読み上げるだけであるならば、事前の準備でなんとかなるが、アドリブ性が求められる質疑応答では、その場で英語を聞きとり、内容を正確に理解し、回答を即座に構成するだけの能力が要請される。質疑応答で日本語に切り替えざるを得ない発表者もいくらかいたが、それは、質疑応答においては相応の語学能力が必要とされることの証であろう。繰り返しになるが、自身の研究を深めるとともに、語学能力を磨くことも海外発表においては必要となる。そしてそのためには自身の努力と協力者のアドバイスが必要不可欠であろう。

#### 【仲 修平 (M1)】

「国際発信能力の涵養はいかにして可能なのだろうか？」これは、KG/GP 社会学批評第3号の特集のタイトルだ。特集を読んで以降、スタートに立ったばかりの自分の研究ではあるが、何らかの形で発信していきたいと強く思うようになった。先の問いについて自分なりに考えながら、今回の APW セミナーを振り返りたい。

報告者は、本プログラム前日のセッションに、'Redefining Self-employment in Japan'と題して報告を行った。プレゼンターは報告者を含めて5人で、全員の英語で報告後に、コメント・質疑を受けた。このセッションの参加者全員が日本人であったため、応答は日本語で行われた。報告内容は、1990年代以降の雇用形態の変化を社会的な背景として、これまでマクロな視点では捉えきれていなかったが、独自の働き方を実現しているとされている自営業層とはいかなる職業であるのか、という問いに答えようとしたものだ。今回の報告は、「自営業」に関して、官公庁データによるマクロな雇用形態の変化と自営業をめぐる職業移動の変化については、SSM 調査データを用いて統計手順に準拠して分析を試みた。これらは、修士論文の序章になる部分でさらに内容をつめていく必要があるが、今後につながる報告ができた。

さらに、報告後の時間に、'Working poor'や'Precariat Union'を研究している方々と個別にディスカッションをできたことが大変有意義であった。研究領域が、総合政策や政治学と少し異なっていたが、両研究者とも、雇用の流動化にともなう問題を捉えようとしている点で共通しており、今後の研究のために大変参考になっている。

一方、5名発表後の全体のコメントとして、「研究の問い、背景、方法」がまだまだクリアではない、という指摘があった。もちろん準備の段階では、それらの点について明確にしようと試みたが、内容を十分に詰め切れていない甘さについては真摯に受け止めなければならないだろう。しかしそれは、発表の仕方の問題があるだけでなく、今後の自分の課題でもあるため、今回の報告を修士論文に活かしたい。ただ、準備については、GP スタッフの方々によるきめ細かな指導が今後の財産になっている。発表の構成を考える段階、発表原稿の添削や発表練習でアドバイスをもらいながら取り組むことで、現時点でのベストの状態まで引き上げてもらうことができた。そのため、発表では自分のやってきたことを出すだけなので、多少の緊張はあったが、気持ちに多少の余裕をもってできた。それは私の中では一歩前進であり、とても良い環境のサポートのおかげだと感じている。

他方、本プログラムは、'Work&Labour'、'Education'、'Linguistics'等の各セッションに分かれてそれぞれその研究者からの報告があった。何よりの収穫は、海外で発表するためのプロセス（準備→発表→質疑応答）を経験できたことである。最後の「質疑応答（司会者のフィードバックも含む）」は、他の研究者の発表を通して学ぶべきことが多かった。特に、「自分の研究が、どのような学問領域であり、その研究がどのように貢献するのか」、というコメントが印象深かった。今回は、社会学だけではなく、社会心理学、言語学、教育学や政治学など領域が多岐にわたっていたため、先の問いがより明確に示されなければ、オーディエンスと対話することが難しかったように感じられた。たとえ近い領域の人であったとしても、そのような意識を普段から持って自分の言葉で言語化していく必要がある、ということを痛感した。

2つのプログラムを通して見えてきたのは、自分の研究をどのように相対的に捉えてアウトプットしていくのか、という問題だ。これは準備段階でもアドバイスをもらっていたことだが、身をもって知ることができた。特に、日本/海外ということで社会的なコンテキストが異なるため、なぜそれが問題なのか、がまず共有されなければならない。その上で、プレゼン時間内で明らかにした「限定された問い」を示す必要がある。この2つがクリアになればオーディエンスに伝わり、質疑応答もより中身の濃いものにあるだろう。

最後に、今回のセミナーで得られた経験から、「国際発信能力の涵養」について考えてみたい。答えはきわめてシンプルで、場はどこであれ、まずは「自分の言葉で発信すること」だ。「発信能力」は、当たり前だが、発する中でしか鍛えられない。しかし頭では分かっている、「国際」という言葉を見ると反射的に、「私は英語が苦手だから…」という類いの能力面で負のスパイラルに陥る。たしかに英語で伝えることに抵抗はあるし、緊張もする。しかし、それは二次的なことであり、「研究」を何らかに形で社会に還元していきたいと考えたとき、日本語に縛られることは有益なことなのだろうか。今回のように、英語で発すればそれだけ多くの人にコメントをもらうことができる場合もあるし、人のつながりもさらに広がっていくだろう。研究者であろうとなかろうと、自分の言葉で、それが日本であれ英語であれ、話すことが何よりも重要だと考える。発信する場が、海外なのか、はその次の問題だ。今回のセミナーに参加することで、海外で発表するイメージがよりリアルに感じられるようになった。そしてそのことが、私にとってとても良い刺激を生み出している。次の機会に備えて、日常生活に戻っても準備を進めていきたい。

### 【松村 淳 (M2)】

今回、二度目のオーストラリア国立大学におけるサマースクールに参加させていただいた。私を含む修士課程の学生五名は今回特別に設けられたプレセッションでの発表になった。オーディエンスは現地に客員研究員として派遣されている名古屋大学の大学院の教授をはじめ、ANUの大学院生や国立図書館のスタッフなどであった。事前の想定とは若干異なり、日本人のみのオーディエンスではあったが、発表は予定通り英語で行った。一人ずつコメントをもらう形式ではなく、全員の発表が終わった後に総評的にコメントをもらう形になっていた。そこで頂いたコメントの中で共通していたのは、「なぜその研究をするのか」「その研究がどうして大事なのか」ということをきちんと説明することが必要であるにも関わらず、われわれの発表にはそれがおしなべて欠けていたというものであった。自分の研究を社会学の研究史という時間軸において(タテ)に位置付けることと、異なる分野のメソッドとの比較において相対的(ヨコ)に位置付けることの二つが必要である。それらについては自覚的であったつもりだが、先方にはうまく伝わっていかなかった。他に指摘された項目としては「依拠した分析枠組みや方法論を明確にせよ」というものである。政治学が専門の方からの意見であったが、これについては参加者の中でも意見が分かれた。特定の地域を対象とした研究においては、特定のメソッドで対象を分析することはともすれば一面的な把握に終始してしまう恐れがある。メソッドの網の目からこぼれおちる(雑多で多様なもの)ものを捨象することは、「質的」に対象に迫る研究においては致命的な欠落となる。

今回のオーディエンスはたまたま全員日本人であったが、英語での発表、そして海外での発表では想定される質問をある程度内在化させた発表が必要であるように思う。とくにローカルな地域を対象とした質的研究の場合はそうだ。私の場合は阪神御影地区を取り上げたが、その際、世界的に知られる「阪神淡路大震災」というキーワードを意識的に盛り込むことによって、「震災→破壊→再開発」という大まかな流れがオーディエンスの人々に意識されやすいように工夫した。

これは前回の発表の経験から学習したことである。全く文脈を共有できないオーディエンスとは議論はできない。15分から20分の短い発表の中で、共有できる文脈を提供しつつ自分の研究の内容を伝えることの困難さは国内の学会でも共通する課題ではある。しかし、国や文化、言葉を共有しない人々に研究内容を伝えることは、国内学会とは比較にならないほど困難である。それでもワンフレーズでも共有できる概念や事例が提示できたら、議論は意外にスムーズに進むものである。

二回のオーストラリア発表を体験して改めて思うことは、「語学力よりも研究内容が肝要」ということだ。しかし、語学(あるいは統計などのスキル)は自分の研究を広く分かりやすくプレゼンテーションするためには非常に有用なスキルであることは疑うべくもない。武器は多いに越したことはないのである。

### 【山森宙史 (M2)】

#### ・準備期間

発表準備に向けた期間が修士論文の執筆期間と重なったため、綿密な発表資料の制作と十分な発表練習ができなかったことが悔やまれた。また、読み原稿の作成に意識が集中しすぎたこともあり、自身の発表を軸にした英語でのディスカッションの練習も十分に出来なかった。これらの点からも、今回の海外発表における準備は不十分であったと反省している。一方で、GP事務室の方々や、川端先生

やヤングさんの英語指導のおかげで、発表内容の全体的なレベルは確保され、安心して出発することができた。

・発表当日

自身の担当する発表は、JSGSS の前日に設けられたセミナー内で行った。このセミナーは、主に ANU に留学している日本人の院生、研究員や今回のセミナーに日本から参加した方々から構成される研究会という規模だった。発表は用意してきた英語原稿で行われたが、ディスカッションは全て日本語で行われたので、英語で上手くディスカッションできない自分には都合は良かったものの、英語で自分の研究についてディスカッションするという経験を出来なかったことには悔いが残った。

また、オーディエンスがみな日本人ということもあり、自身の研究テーマ（マンガ）についての背景は無前提に共有される部分があったものの、やはり個人的にこれからの研究課題である国際比較を考える契機として、現地の人からの経験や意見を頂きたかった。

発表内容に関するオーディエンスからの反応をもとに反省すべき点もいくつか提起された。まず、今回の「Japan studies」に社会学を専門領域とする研究者が少なく、それゆえに、自身の研究が社会学であるという暗黙の前提を持って臨んでしまったことが挙げられる。そのため、自身の研究がいかに「社会学」であるのかという問いを再度突きつけられることになった。それと関連して、次に提起された批判はリサーチクエスションの不透明さであった。今回の発表がオーストラリアでの日本文化を対象としていただけに、個々人が細部のディテールにこだわった結果、そもそもの学術的な位置づけを十分に提示したうえで、議論を精査することができなかったのは反省点として残った。

・総括

初めての海外発表であるとともに、人生初めての海外旅行ともなった今回のオーストラリア発表は、多くの反省点を残しながら、それ以上に実りあるものになったと思われる。とりわけ「マンガ」という対象をドメスティックな視座から研究してきた自分には、オーストラリアのマンガ事情を含めより多くの情報や視点を獲得することに成功した。そして、今回の海外発表を契機に今後も積極的に日本の外に目を向けた文化研究の必要を感じた。

【福田 雄 (D1)】

今回は、大学院 GP の国際プログラムの一つとして、ANU Japanese Studies Graduate Summer School 2011 (以下、JSGSS) に参加し研究発表を行った。以下では JSGSS の概要、準備、研究発表の成果について報告したい。

JSGSS は、Australian National University を中心にした日本研究者が集う学際的プログラムである。これまで、様々な学問分野から若手研究者が集まり、意見交換やネットワークづくりがこれまでなされてきた。非西欧圏における追悼・慰霊に関心をもつ私は、日本だけでなく中国・台湾・韓国などの東アジアにおける追悼・慰霊に関心をもつ研究者と情報交換できればと考え、参加することにした。

すでに国際ワークショップでの英語発表を経験していることもあり、準備段階としてそこまで周知な準備を行ったわけではない。しかし発表要旨と 300 語程度のペーパーを出すにあたり、GP 事務室の川端氏やテランス氏に助けて頂いた英文チェックは大変心強かった。また現地までの交通・宿泊等のコーディネートについては GP 事務室からの支援があったので、JSGSS で会う可能性のある研究者の業績のチェックなどに時間を割くことができたことは大変有り難かった。

私が研究発表したのは三日目であるが、当日の個人発表の時間だけでなく、その前後のインフォーマルな場で様々な情報交換や、意見のやり取りをすることができ大変貴重な時間を過ごすことができた。特に二日目に基調講演を行ったハワイ大学社会学部の Patricia Steinhoff 教授との出会いは望外の幸運であった。というのは、昨年私は公共性と宗教というテーマのもと、Robert Bellah の市民宗教論に取り組んでいたが、彼女はハーバードでの Bellah の教え子であり、私の研究テーマに多大な関心を寄せ、今後の研究方針についてのアドバイスとともに勇気づけてくださった。また JSGSS 三日目で彼女が講師となって行ったワークショップでは、社会学と地域研究という学問分野の対立と協同がテーマとしてとりあげられ、今後のキャリアのなかで自分がどのような立場から研究を発信していくのか、という問題についての考えを明確にすることができた。Steinhoff 教授とは、その後メールのやり取りのなかで私の研究テーマに関連する研究者を紹介してくださるなど、連絡を続けることができています。

このように研究発表以外の場での様々なコミュニケーションのなかで多くを得たことが今回 JSGSS に参加したことによる成果だったように思う。

#### 【前村奈央佳（研究員）】

昨年7月にメルボルンで開催された学会に引き続き、1年間で冬と夏のオーストラリアを少しずつ経験する幸運に恵まれた。少なくとも数百名の参加者がいる国際会議とは異なり、今回のサマースクールは参加者一人一人の顔が見える規模のもので、それがかえって新鮮に映った。ここでは、1)自分の研究発表と「日本研究」について、2)大学院生の研究支援プログラムとしてのサマースクールについて、3)異文化体験としてのサマースクールについて、の3点を中心に振り返って記述しておきたい。

まず、このサマースクール全体の大きなテーマとして「日本研究」があったが、このアプローチの仕方じたいに不意を突かれた気がした。日本で他の国や地域のことを研究されているのは当然のように知っているにも関わらず、外からの研究対象として「日本」を意識したことがなかったからだ。極端な言い方をすれば、これまで自分が対象としてきたのは(希望も含めて)“human in general”だと考えてきたし、比較文化的な文脈の場合を除いて、「日本人」だけに特化して議論したいわけでもなかった。しかし、今回発表したような日本における外国人研修生の事例は、まさに日本の歴史的・政治的・文化的な特殊性を抜きに考察することはできない類のものであり、であるからこそ、外から日本を研究する人々にいかに発信し議論をするかが重要なのだと気づかされた。自分は日本人を研究しているのか、日本という環境に置かれて影響を受けている“human in general”を研究しているのか、どこまで一般性を求め、どこまで特殊性に言及するのかなど、研究の位置づけに関する大きな課題に出会ったように思えた。

次に、大学院生の教育プログラムとしての今回のサマースクールを振り返る。社会学研究科ではここ数年、大学院生の研究支援プログラムが充実していた。身内をひいきするようだが、今回のプレゼンテーションを比較すると、見せる・伝えるという点において他の院生より優れた発表も多かったように思う。それは、スタッフに指導を受けながら、事前に発表練習をする機会に恵まれていたからに他ならないだろう。私も含めて英語でのプレゼンテーションには抵抗を感じる人が多いであろうし、目先のほかの課題を優先して、後回しにしたり避けたりしてしまいがちである。だが、研究を発信する道具としての英語やプレゼンテーションのスキルは、研究者になる上で必要不可欠であることは言うまでもない。今回のサマースクールのように、研究科として大学院生をバックアップする体制を整え、早い段階から抵抗を減らすことは重要であろう。

最後に、異文化間接触の研究者として、サマースクールの経験を考えたい。これまでいくつか国際会議に参加したが、今回のように主催者側とインフォーマルな雰囲気でも過ごしたことも、現地で研究する日本人に会って話をしたこともなかった。異文化適応の研究では、適応に必要な要素として、新しい文化と自分の文化をつなぐ「キーパーソン」の存在の重要性が指摘されている。現地で研究する日本人の人々は、先に異文化に入っていた人々であり、私たちの「キーパーソン」にあたった。また、異国で同胞の人たちと出会うときの「ほっとする」感覚こそ、自分の日本人としての *social identity* なのだと実感した。現地で経験した温かい時間は、国際学会など新たな機会を目指すのに必要な心のハードルを下げしてくれる。今回が初めての海外経験だった大学院生にとって、まさに理想的なスタートだったのではないか。

### 【テランス・ヤング (GPRA)】

この報告は英語担当のリサーチ・アシスタントの立場からである。ANU で行われた *Japan Studies Graduate Summer School* の準備は 2010 年の 10 月から始まり、サマースクール寸前の二月の頭までであった。主な目的は社会学研究科の院生・研究員が ANU で行うプレゼンテーションの作成を手伝うことであった。それに向かつてはまず、参加者が日本語で研究テーマについて発表して、発表に対するコメントとディスカッションによってテーマの焦点を絞り込んだ。その後、日本語原稿を作り、それに基づいて英文の発表原稿を作った。英文原稿は助教の川端浩平と RA のテランス・ヤングが添削し、発表者は修正された英文原稿を基にして英文のスライドを作り、英語での発表を各自 2~3 回練習した。以上が準備の過程であるが、反省点を挙げたい。まずは、日本語原稿の段階で 15 分から 20 分の発表時間を頭に置きながら内容と長さをしっかり絞ることが大事である。日本語原稿の内容がしっかりしていないと、後で英文に直す時に困難が生じる。英文原稿の出来上がりが遅れると英語を修正する側に余計な負担がかかってしまう。今後はもっと早い段階でテーマ内容を確立し、出発の一か月前に英文原稿の作成を終わらせて、準備期間の残りはスライド作成・修正と発表の練習に集中するべきである。そして、発表者は原稿通りの内容だけではなく、口頭発表後に受ける質問に英語で応対できるよう、予想する質問に対する返答も準備することを勧める。

JSGSS は 1 時間半のいくつかのセッションに分かれていて、発表者は約 20 分の発表と約 10 分の質疑応答の時間が与えられていた。実際の発表に関しては、制限時間を越えた発表者もいたので、練習時に掛る発表時間を 15 分に抑えると良い。発表時間を守るのは他の発表者に対する気遣いのためだけではなく、自分の発表に対する質問やコメントをできるだけ多く貰うためでもある。また、セッションの司会者は発表者のショートペーパーを持っているが、会場にはアブストラクトしか配られないので、発表内容によっては配布資料を準備するのも有効である。他校の発表者の中にはスライドを準備しなかった者もいたが、やはり内容が理解し難いことがあるので、やはり、視覚的資料を準備することを勧める。会場から出たアドバイスとしては、発表の導入部分で研究テーマだけではなく研究の仮設、意義、方法、と結論(予想でも良い)を明確に示すべきであるというものがあった。最後に、JSGSS ではセッションの合間や宿泊していた寮で他大学から来た大学院生や教員らと接する機会があるので、そのような時間を有効的に使うことを勧める。

以上。